

旬なひと

ふらさとinterview

粹なひと

NPO法人リボルヴ学校教育研究所 理事長

小野村 哲

おのむらさとし

「学校は辞めましたが、

転職したわけではないですから」と語る。教育改革が

呼ばれる中、民間の立場から、「教育」を論じ、実践する。

子どもをまっすぐに見据えた

活動とエピソードは、

学校や教育という枠に納めるには

あまりに多彩で大きすぎる。

教育に込めた「生きる力」を

表現する教育者だ。

ライズ学園についてお聞かせください。

既存の学校に上手く適応できない子どもたちに新たな学びの場を提供しようというのが「ライズ学園」の活動です。今の大規模な大型バスだとしたら、私たちはタクシーみたいなものですね。「子どもたち一人一人を大切にします」って言うのは簡単なんんですけど、これは本当に難しいことです。現在の学校はより多くの子どもたちに、均質の教育の機会を平等に与えるという点では優れているけれども、やはり画一的にならざるを得ないところもあります。私達は小さなライズ学園の中で、一人一人の違いを大切にしながら、その可能性を伸張できればと考えています。

「学習困難」についての啓蒙活動などもされていますね。

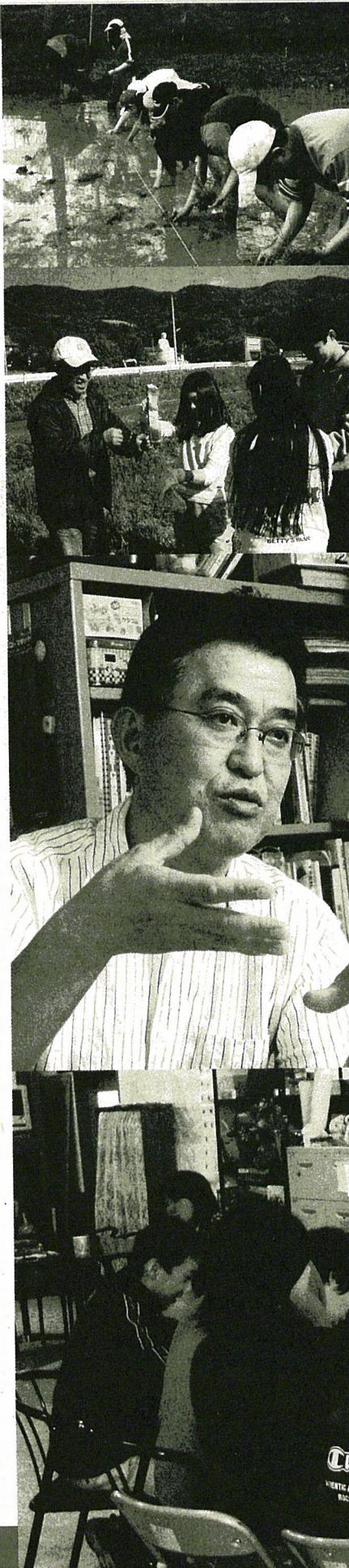
例えば、ある子は九九を覚えるのに、普通は「に・が4」「に・さんが6」って覚えるのでしようが、それでは覚えづらい子もいて、ただ一覧表をじっと見てパチッと目に焼き付けて覚えてしまう子もいるんですね。「そういう子もいるんですよ」ということを学校の先生方にも理解してもらいたい

くて、セミナー・ワークショップなどを行っています。様々な個性、その違いを知った上で、どういう支援をしていけばよいか。「できない」と思っている子でも、大きく伸びることがあるんです。

「今までいる」子どもたちへの支援だけではなく、そうですね。

不登校になつたらライズ学園においてではなくて、総合的に子どもたちの育ち、学びの環境を充実させていく、というのが私たちの活動の目的です。ライズ学園でも野菜作りや調理教室など体験的な学習に力を入れていますが、小中学校への社会人講師のコーディネートにも取り組んでいます。結城紬の機織り体験やプロのダンサーによるダンス授業、お箏教室や工作教室、国際理解教室なども好評をいただいています。

いえ、そんなに単純ではないですよ。学校だけを変えて駄目だと思います。どんどんシャッターを下ろしている商店街の道を歩いて学校へ通っている子どもたちが、



その地域に残ろうと思うでしようか。昔ながら「俺は高校には行かないよ。その代わり、一人前の職人になるんだ」といえる時代がありました。今は勉強をして大企業などに入る、ちょっと勉強ができないと負け組だ」とみずからにレッテルを貼つたり、不登校になつたら人生先が見えててしまうというような錯覚した現実感があります。地域経済が、子どもの教育に深く関わっているというわけですか。

田舎に行くと、コンビにたむろしている子どもたちをよく見かけます。行き場が無いわけですよ。経済的に余裕があれば、遠くても塾に送り迎えできる家もあるでしょ。が、水戸や土浦の市内ならまだも、大子や里美からでは、なかなか塾には通えないし、大学に行きたいと思つても、戸の進学校までなかなか通えないのが現状です。結果として、教育的にも経済的にも格差が生じてしまふ。なかなか、子どもに「夢を持つ」と言えないですよ。そういう問題を解決するためにも、大都市に吸い上げられてしまつて、いるお金をもつて地域で回す必要があると思うんですよ。

学園ではオリジナルの教材を作られているとか。以前、NHKで紹介されましたね。

ええ。学校の教材のほとんどは県外の大

手出版社で作られています。授業をしたことが無い方々が作つたりしているので、なかなか実態にそぐわないし、酷いものになると30年40年表紙しか変わらない教材もあります。私たちは先生方が教室の中で学んで工夫した実践をまとめて、それを出版して子どもたちに還元する活動をしています。そこから生まれた収益を元に、教育公開講座を開いたり社会人講師を作つていこうという活動です。

県内の小中学生が年間に使う教材費が総額でどのくらいになるかはわかりませんが、仮に3,000円分だけでも自給できたら、年間で8億近くものお金が県内に落ちることになります。現状は、その大半が県外の出版社行き。なにゆえ、茨城の子どもたちが、東京の出版社のオフィスで作られた教材を買う必要があるのでしょ。うね。

ところで、小野村さんご自身は、どのような子どもだったんですか。

ちょっと変わった子だったと思いますよ。

(笑)今でも覚えているのは、幼稚園の時

に知能テストをやつたんです。シーソーの

両側にライオンと象が乗つていて「どちら

に傾きますか」という問題でした。同じ大

点から同じ距離に乗ついたら象のほうが傾きますよね。ところが、象がライオンと一緒に乗つて重い人だつて軽く止まつてしまつて「この問題はわかりません」と答えたんです。そのときの担任の先生は三者面談のときに、私の前で母に向かって「普段口が立つので頭が良いかなと思つていたけど、思ったよりバカでした」と言われたんです。小学校の知能テストでは、結果が良すぎて、「この子は知能指数が高すぎる」ので、赤軍派になります」と言わるし、高校の時には石川啄木の「じつと手を見る」を読んで、「啄木は手相を見たと思う」と答えたら、「おまえは文学を冒涜している」と怒られる(笑)。

わかつてもらえないのは辛いですね。自分を認めてくれる人の存在が私にあつたのが救いでしたね。いまだに心の中にあります。二人の祖父です。母方の祖父は、小さい時から私のことを「この子は見所のある子だ」とずっと褒めてくれました。泣き虫で弱虫でしたが、いつも「この子は…」

「この子は…」と可愛がつてくれましたね。

父方の祖父は無口な職人で、頑固・徹な

人でした。ある雨の日に、庭で水路を作つた

て人形を並べて遊んでいたんです。小学校6年生くらいのとき。そんなことをするにはちょっと恥ずかしいくらいの年でしたから、人目を忍んでやつてたんです。それを縁側で見ていた祖母が「そんなに大きくなつて、そんなことをしてて！」と言うのを聞いた祖父が、普段余計な口は一切聞かないのに、「ほつとけ！」と祖母を叱つたんです。「こいつは、こいつだ。この子はこの子でいいんだつて…」

大学時代に出会った先輩や社会人の方々、就職してからの上司や同僚など、随所隨所で認めてくれる人に出会えて、私は本当に運が良かつたと思いますね。

みずから子どもたちと係わる活動はいつも頗だつたんですね。

大学時代に、レクリエーション研究会というサークルに所属したんですね。子どもたちを連れてキャンプ場などへ行つて、ハイキングとかオリエンテーリングとかキャンプファイヤーとか。レクリエーション指導員の免許を持つてたんです。

印象に残るエピソードをお聞かせください。

富士五湖の西湖でキャンプをしたとき、

帰国されて、奥さんと息子さんを連れて

来られたんです。ご主人は少し遅れて成田空港からタクシーで西湖までお越しになられて。キャンプ場にアタッシュケースとスース姿ですよ(笑)。ひと目見てちよつと冷たい感じの方だなって思いまして、ご夫婦もほとんど会話が無いし、子どもだけがはしゃいでいて…。

晩御飯はキャンプ場の中で材料を調達して自分で作るんですが、ご主人がたいへん怒つて、私のところへ来て、「私に自分で食事を作れっていうんですか」と言つた。外で食べてくると言つのですが、タクシーを呼ぶと言つても、すぐには来ませんからね。「だつたら、もういい」という話になつて…。男の子は僕らのほうをじつと見ているので、「お兄さん手伝うから、一緒に作ろうか」と言つたら「うん」というので、ご家族が泊まっているキャンピングカーの前でご飯作りを始めたんですよ。

しばらくしたら、お父さんが顔を出してきて、「一緒に作り始ましたんでも、アドバイスしてもぜんせん聞いてくれない(笑)」。「飯ごうは失敗しますから」と言つても、いわゆる「初めチヨロチヨロ、中パッパ」の要領、素人には難しいテクニックで、頑として蓋を開けないんですよ。「まだ噴いてないから」って。最後には飯ごうの下に穴が開いちやつて、中は炭化してしまいました。男の子はがつかりですよ。

奥さんもすつかり固まつてしまつたので、「もう一回やつてみませんか」と言つたら、ご主人は「不愉快だ」と言つて中に入つちやつて。結局、カレーを作り上げて、ご主人はキャンピングカーの中で黙つて食べて、空いたお皿だけ出していくようなりました。

3泊4日、万事その調子でお過ごしされたんですか…?!



【プロフィール】 小野村 哲 おのむら さとし

リヴォルヴ学校教育研究所理事長、同ライズ学園学園長。1960年東京都生まれ。83年から99年、つくば市内の公立中学校に英語教諭として勤務し、91年文部省全国研究指定校中間報告会にて代表発表、茨城県教育研修センター英語科教育研究講座講師、同センター研究協力員を務めるなど、数々の実績を残す。99年に退職後、リヴォルヴ学校教育研究所を立ち上げ(2001年3月法人化)、不登校児童生徒の支援にあたる他、子ども達の学習上のつまずきに関する講演活動を行っている。05年には独自の学習理論に基づいた『ひらがなれんしゅうちょう』を出版。NHKや全国各紙で取り上げられるなど注目を集めている。4児の父。日本軽度発達障害ネットワーク議員。『中学校英語科授業の創造と指導細案』(明治図書・1993年)分担執筆、『サンシャイン イングリッシュ コース実践指導事例集』(開隆堂・1994年)共同執筆、『もじのかたちをとらえるためのひらがなれんしゅうちょう』(いばらきマナビ・ネット・2005年)、『おのむら式ひらがなれんしゅうちょう』(主婦の友社・2005年)、『もじのかたちをとらえるための ひらがなえほん』(いばらきマナビ・ネット・2006年)、『よめるかけるABC英語れんしゅうちょう』(いばらきマナビ・ネット・2006年)など数々の教材を手がける。

撮影:永井 浩行

NPO法人 リヴォルヴ学校教育研究所
〒305-0051 つくば市二の宮4-8-3 1-404
TEL&FAX: 029-856-8143
Email: npo_rise@ybb.ne.jp
URL: http://www.rise.gr.jp/

SATOSHI ONOMURA

翌日も、こちらは懲りずにおはようございますつてご主人に声をかけて、朝のラジオ体操にお連れしたりしました。突然、曲が速くてお笑いみたいになるんですね。ラジオ体操のメロディ「ドナ・サマー」の曲に変わる番狂わせな悪戯をするのですが、みんな唸然としているのを「ちゃんとやつてください」と、やらせちゃうんです。もちろん、そのご主人も一緒にジョギングをしたり、裏山に登つて植物採集をしたりとか、いろいろなプログラムに参加してもらいました。

最後は得意のキャンプファイヤーでしたが、ご主人は罰ゲームをやつたんですね。ゴキブリになつて、シューツでやられるといつくり返つて手足をばたばたさせるんですが、それをご主人がやつたんです。

生きる力ですね。就職活動をしている息子が「どんな所から会社回ればいいのかな」と言つてますね。「お前の好きなどころから回ればいいんじゃない」って答えています。息子のほうは「それだけじゃ、わからん」と言いますが、大きい会社だからいいとか、名前が有名だからいいじゃないなって思つたところで決めたらいい。どこ

で、そこに行つて空気を嗅いで自分が良笑つたり泣いたり喜んだりしての姿を見ると、やっぱり可愛いですよ。

現れて、「足先に帰らなくちゃいけないの」とか、そういう人生つてありえないと思うのです。お金では失礼だと思って、あえてこれにしましたつて。それがすごく私たちには嬉しかつたです。でもなにより、あの男の子が、本当に嬉しそうな顔で帰つて行つたのが、今でも忘れられないです。そうした出会いや感動から、小野村さんは何を得られましたか。

生きる力ですね。就職活動をしている息子が「どんな所から会社回ればいいのかな」と言つてますね。おもしろいですよ、子ども成長は理屈じゃなく、おもしろい。子どもたちと遊んでる時ですよ、花が咲けば嬉しいように子どもが一生懸命怒つたり笑つたり泣いたり喜んだりしての姿を見ると、やっぱり可愛いですよ。

教師の器として、深い懐を感じます。

いいえ、私に言わせれば「たかが教師」です。私たち将来の世界的な歴史上の人物と接しているかも知れないわけですよ。それを自分の狭い器でちょっとと言ふことを聞かなかつたりすると、「お前は駄目だつてやつちやいがち。枠にはめちゃうんですね。自戒も含めて、子どもとのそういうすれ違いは避けたいですね。